遊戯王　ソリスト

sasami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　ソリスト

【Ｎコード】
Ｎ７１７２Ｙ

【作者名】
ｓａｓａｍｉ

【あらすじ】
遊戯王カオスの２年３ヶ月前、１人の男が教官になる依頼を受けた。
その男の名は、朧瑩。孤独を好み、絆を嫌う男。その男に待ち受ける運命とは？（オリカ多数）

過去の出来事

～とある建物の一室～

「……１０００万でどうだ？」

ソファに座っているアタッシュケースを持ったスーツの男が、反対側に座っている男に札束の山を差し出す。

「……安過ぎだ。」

「なら幾らなら引き受けるのだ！？」

スーツの男が憤慨すると、反対側に座っている男が脚を机に叩きつけた。

「１億だ。集団行動はそれ以下では受けん。」

「……わかった。それで受けてくれるのなら、差し出そう……。」

「交渉成立だな……。」

男はアタッシュケースごと金を受け取る。

「依頼は明後日から受けてやる。とっとと帰れ。」

スーツの男は後ろのドアから部屋を出ていった。

「今回は結構稼げたな……。暫くは楽できるな。」

男はソファに背を掛け天井を見上げる。

そして、再びドアが開かれる。

「なんだ？依頼料は変更しないぞ？」

ドアの方を見ると、先ほどの男とは違う人物がいた。

「誰だ？」

「ど～も～、私一応神様やってるサロッゴって言います。今回は君に用があって来」

バタンッ

男はすぐにドアを閉めた。

「さて、稼いできた金の総額でも数えるか。」

バンッ！！

「ちょっとなんでいきなりドア閉めるの！？」

さっきのサロッゴとか名乗った人物が勢いよく扉を開け、涙目で訴えてきた。

「仕事の邪魔だ、とっとと失せろ。」

「なら仕事として頼むよ。」

「……どういう仕事だ。」

男は眼の色を変えて聞く態勢に入る。

「え～と、とりあえず君には2年後、正確には2年と3ヶ月後にある人物を助けてほしいんだ。」

「依頼料は１００億だ。」

「高っ！！？さっきの人は1億だったじゃん！！？」

「何処の誰とも知らん馬の骨に、俺のこれからを決められて堪るか。それ位の金を持ってくれれば、引き受けてやったっていいがな。」

「……神様でも、財政難っていうものはあるんだよ？」

「ならとっとと出ていけ。」

男はサロッゴの襟を掴んで引きずりだした。

「……仕方ない、この手は使いたくなかったけど……」

サロッゴが手を叩くと、男の下に魔法陣の様な物が現れた。

「……これは。」

「その中にいる限り、君は動くことができない。解除してほしかったら大人しく私の言うことを……」

「……かったりい。」

次の瞬間、男の下にあった魔法陣が砕け散った。

「うそ！？」

「確かお前、一応神様とか言ってたな。」

「え、あ、はい。」

「なら無駄なことだ。俺にはそういったものは効かん。」

「え～～！？」

「だからとっとと帰れ。」

男はサロッゴを外に摘まみだし、ドアを閉めた。

「……こうなったら、実力行使！！」

サロッゴはドアに向かって突っ込む。

ガチャッ

「え？」

丁度よくドアが開き、出迎えた物は、男の殴りかかってくる拳だった。

「あああああああああああ・・・・・・・・・・・・・」

サロッゴは勢いよく空に飛ばされていった。

「やっと静かになったか……。」

男はソファに寝そべり、そのまま眠りについた。

そして2日後……、

男は、依頼を受け、ある国の軍事基地の教官となった。

「今回、依頼を受けて教官の位置に付く、朧瑩(おぼろけい)だ。今日から殺す気で扱いていくから、遺書を書いとけ。」

「「「ええ！？」」」

隊員は全員驚いた。

「どういうことだよ！？新しい教官って、まだ子供じゃないか！？」

「俺が知るかよ！？」

「そこ、聞こえてるぞ。」

隊員達が煢について話していると、

「上司が呼んだ新しい教官っていうから少しは期待したが、まだガキじゃねえか！」

一際体の大きい奴が前に出てきた。

「文句があるならかかってこい。」

「へッ、なら遠慮なく行かせてもらうぜ！！」

巨体の隊員が煢に襲いかかった。

煢は一瞬で隊員の後ろに回り込み、蹴りを入れた。

「ブッ！！」

隊員は壁にめり込んだ。

「これで文句のある奴はいないな？」

「「「は、はい！！」」」

他の隊員全員が煢に対して敬礼した。

その時、基地全体に警報が鳴った。

『侵入者発見、侵入者発見、ただちに排除せよ。』

「こんな時に侵入者だ？一体誰だ？」

基地の入り口、そこには１つのＤホイールが置いてあり、

１人の男が基地の中に入ってきた。

「……ここに、あの情報が…。」

その男の名は、紫藤紫苑。

激闘（前書き）

デュエルは次回からになると思います。

激闘

軍事基地に侵入した紫苑は兵隊に囲まれた。

「動くな！抵抗しても無駄だ！ただちに両手をあげて降伏しろ！」

隊員の一人が紫苑に銃を向け忠告する。

「……俺は、ある情報を知りたいだけだ。」

紫苑は忠告を無視して歩き出す。

この時の紫苑は、混沌邪宗の情報を探し回り、この基地にあるという噂を聞き訪れた。

実際、そのような情報はなかったのだが、この時の紫苑はこのことを知らない。

「……撃てええ！！！」

兵隊が一斉に紫苑に向け発砲した。

紫苑は全ての銃弾を片手で受け止めた。

「なんだと！！？」

「怯むな！撃ち続けろ！！」

兵隊達は続けて撃ち続ける。

「……仕方ない。」

紫苑は全ての弾丸を両手で受け止め、飛んでくる弾丸に向けて寸分狂わず命中させる。

「こいつ化物か！？」

「くそっ、弾切れだ！！」

銃弾が切れた隙に、紫苑は隊員達の懐に入り込み、全員を気絶させていく。

「かっ……はっ……」

隊員達は次々と倒れていく。

煢はその光景を基地の屋上から見ていた。

「……相手は一人か。流石に1億で引き受けた仕事を1日で潰されるのは困る…。」

煢は屋上から飛び降りた。

紫苑は上空から来た煢に気付き、身構える。

煢が無事に着地すると、周りに砂埃が舞った。

「……。」

紫苑は構えを解かない。
対する煢も構えを取ったまま動こうとしない。
沈黙が続く中、紫苑の口が開いた。
「……お前、歳は幾つだ？」
「なんでそんな事を聞く？」
「……答えろ。」
「13だ。」
「……そうか。」
紫苑は構えを解いた。
「……何のつもりだ？」
煢もまた構えを解く。
「……弟と同じ年の奴と戦う気はない。……そこを退け。」
紫苑が煢に話を持ちかけた。
「残念だが、大金の掛かっている仕事を1日で潰されるわけにはいかないからな。」
「……そうか。」

紫苑と瑩は互いに踏み出し、ぶつかり合う。

二人がぶつかった瞬間、衝撃波が周りの兵隊達を吹き飛ばした。

「「「うわあああああ！！！！」」」

お互いに殴り合いが続き、お互い絶妙のタイミングで回避している。

しかしこの時点で、兵隊達の眼には何が起きているのか理解ができなかった。

「……なんだよあの二人、手も足も見えねえぞ？」

「化物だ……。」

その後も1時間に及び二人の殴り合いが続いた。

しかしその戦いも突然終わりを告げる。

互いに攻撃をガードし、攻撃の勢いで後方に後ずさる。

「……なかなかやるな。」

「……お前もな。」

「だが、まだ本気を出してないんだろ？」

「……気づいていたか。」

「「「えええええええええええええええ！！？」」」

二人の会話に兵隊達は驚きを隠せなかった。

「ちょっと待て、あれで本気じゃねえのか！？」

「もうついていけねえぞ！？」

「本当に化物か！？」

隊員達の言葉をよそに、紫苑は背中から何かを取りだす。

「……なんだそれは？」

「……俺が作った折り畳み式薙刀・迅雷。お前の力に敬意を評し、本気で相手にしてやる。」

紫苑は薙刀を組み立てると、煢に向ける。

「それはありがたい、とでもいうべきか？」

「……気を抜くと、死ぬぞ？」

紫苑が薙刀を振るうと同時に煢はジャンプして回避する。

薙刀から放たれた斬撃は基地に衝突し、基地が斜めにずれた。

「……確かに油断したら死ぬな、これは。」

「……油断するなと言っただろ。」

紫苑は再び振る態勢に入る。

煢は、今度は伏せて回避した。

再び斬撃が基地に衝突し、基地が崩れる。

「崩れるぞ！！全員、外に逃げろーーー！！！」

「薙刀は近距離だと不利になると思っていたが、認識を改めよう。」

「……次だ。」

紫苑は一瞬で間合いを詰め、連続で突きを繰り出した。

「流石にこれはきついな……、なら。」

煢は紫苑と距離を取り、近くに落ちていた銃を拾い、紫苑に向けて発砲した。

紫苑は薙刀を回し、銃弾を弾く。

煢は紫苑の薙刀に蹴りを入れ、薙刀を折ろうとした。

しかし、紫苑は薙刀を引っ込め、煢の足を掴んだ。

「な！？」

「……俺の勝ちだ。」

紫苑は煢を宙に投げ、一瞬で薙刀をたたみ、高く飛んだ。

「……はっ！！」

紫苑の蹴りが、煢の腹に命中する。

「がはっ……！！」

煢は更に空高く飛ばされ、紫苑は地面に着地した。

そして紫苑は煢を受け止める態勢に入り、落ちてきた煢を受け止めた。

「……俺の負け、か。」

「……ああ。」

紫苑は煢を地面に下ろすと、Ｄホイールへと戻り、去っていった。

数日後、あの基地は完全に倒壊し、依頼の件も無しになった。

「結局金は返すことになるし、ついてねえな……。」

瑩はせっかくの大金を手に入れ損ない、項垂れていた。

先払いとして受け取った金を返すあたり、意外と優しかったりもするのかもしれない。

瑩が上の空になっていた時、ドアを叩く音がした。

「失礼します。」

入ってきたのは、見た限り４０過ぎた男だった。

「なんか依頼か？」

「ええ、人攫いの集団を退治してほしいのですが……。」

瑩は不審な物を見る目をしていた。

「……今どき人攫いなんてものがいるんだな…。」

「ええ、そいつらは私の娘も連れ去っていきました……。どうか、どうか娘を助けて下さい！！」

煢は軽く溜息を吐いた後、依頼料を聞いた。

「ちなみに依頼料は？」

「……１００万では駄目でしょうか？」

「その程度の依頼ならそれでいい。明日には終わらせておいてやるから、それまでに金を持ってこいよ？」

「あ、ありがとうございます！！」

男は早々に部屋を立ち去った。

「さて、それじゃ行くか…。」

煢は部屋を出て、依頼を遂行しに向かう。

この依頼の後、彼の運命を変える出会いがあることを知らずに……。

孤高の力（前書き）

煢のデッキはある意味特殊だと思います。

孤高の力

煢は人攫いグループの討伐の依頼を遂行していた。

「くそっ、弾はまだ残ってるはずだ！！撃ち殺せ！！！」

グループの４人は煢に向けて機関銃を撃ちまくっていた。

（……この前の奴の薙刀の方が速えや。）

煢はそんな事を思いながら、軽々と銃弾を避けながら４人に近づいていった。

「がっ」

「うっ」

「ぐっ」

「はっ」

１人ずつ一撃を加えて気絶させた。

「この調子だと、後１０分で終わるか。」

煢はアジトの奥へ進んでいった。

その後も軽々と下っ端達を蹴散らし、リーダーの部屋まで辿り着いた。

「ち、近づくな！こいつの頭が吹き飛んでもいいのか！！」
グループのリーダーは人質の女の頭に銃を突きつける。
「はいはい分かりました。」
瑩は大人しく手をあげる。
実際、人質を傷つけることなくすぐにリーダーを倒すことはできる。
ただ、それがめんどくさいだけのでやらないだけだった。
「それでいい。だがただ言うこと聞かせるんじゃ面白くねえ。お前がデュエルで俺に勝てたら全員ここから解放してやる。だがお前が負けたら、この場で死んでもらう。」
どっちにしろ、瑩がこの依頼を達成することには差し障りない。
「いいぜ。それじゃ始めようか。」
「「デュエル！！」」
「俺から行かせてもらうぜ？俺のターン！」
グループのリーダーのターンから始まった。
「俺は切り込み隊長を召喚！」
切り込み隊長　ＡＴＫ１２００

「切り込み隊長の効果発動！手札からレベル４以下のモンスターを特殊召喚する！俺はもう１体の切り込み隊長を特殊召喚！俺はカードを２枚伏せて、ターンを終了するぜ！！」

「俺のターン。俺はモンスターをセット、ターンエンド。」

煢はモンスター１体をセットしただけでターンを終了した。

「はっ、手札で事故でも起きたか！？災難だなそりゃあ！！」

グループのリーダーは煢が行った行動を笑う。

「いいからさっさと続けろ、馬鹿が。」

煢はそれを罵った。

「へっ、そんな口がきけるのは今だけだ！俺のターン！！俺は幻獣ワイルドホーンを召喚！！」

幻獣ワイルドホーン　ＡＴＫ１７００

「このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を超えていればその数値分だけダメージを与える！！行け、ワイルドホーン！！裏守備モンスターを攻撃！！」

グループのリーダーが攻撃したモンスターは、

孤高の暗殺者　アサシン　ＤＥＦ０

「はっ、何かと思えば守備力０か！！貫通ダメージを受けてもらうぜ！！」

煢　ＬＰ４０００→２３００

「これで止めだ！！２体の切り込み隊長で……」

「アサシンのリバース効果を発動する。」

「はあ？どうせ大したことのねえ効果なんだろ？」

「自分フィールド上のモンスターがこのモンスターのみの時に破壊された場合、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！」

「何ぃ！？」

「殺せ、アサシン！」

うっすらとした黒いモンスターが、グループのリーダーのモンスターを背後から破壊していった。

「俺のモンスター達が！？」

「はやくデュエルを続けろ。」

「チッ、俺はこれでターン終了だ。」

「俺のターン。俺は孤高の戦士　ソルジャーを召喚する。」

孤高の戦士　ソルジャー　ＡＴＫ２４００

「攻撃力２４００だと！？」

「こいつのレベルは６だが、自分フィールドにカードが１枚もない時、リリースなしで召喚できる。
ソルジャーで相手にダイレクトアタック！」

「させるかよ！！罠発動、聖なるバリアーミラー・フォースー！！
孤高の戦士　ソルジャーを破壊する！！」

「ソルジャーの効果発動。自分フィールドのモンスターがこのカードのみの場合、このカードの攻撃中に発動した罠カードの効果を無効にし破壊する！！」

「なんだと！？うう！！」

グループのリーダー　ＬＰ４０００→１６００

「俺はカードを１枚伏せて、ターンエンド。」

「くそっ！俺のターン！俺は永続罠、リビングデッドの呼び声を発動！！俺は幻獣ワイルドホーンを特殊召喚！！」

幻獣ワイルドホーン　ＡＴＫ１７００

「そして俺はチューナーモンスター、トップ・ランナーを召喚！！」

トップ・ランナー　ＡＴＫ１１００

「……」

「俺は、レベル４の幻獣ワイルドホーンに、レベル４のトップ・ランナーをチューニング！！
シンクロ召喚！！叩き潰せ、ギガンティック・ファイター！！」
ギガンティック・ファイター　ＡＴＫ２８００
「はっはっはっ！！どうだ！！これが俺の切り札だ！！」
「……はぁ。」
瑩はギガンティック・ファイターを見てため息をついた。
「遂に諦めたか！！こいつで終わりにしてやる！！」
「……お前もか。」
「あ？」
「いや、そもそもグループなんかを作ってるやつに期待するのもないか。」
「何を言ってんだテメエ？」
「終わりにしよう、カウンター罠、絶縁波。このカードは自分フィールドにエクストラデッキから特殊召喚したモンスターがいない時のみ発動でき、相手がエクストラデッキからモンスターを特殊召喚した場合、その召喚を無効にし、破壊する！」
「なんだと！？」

カードから出てきた黄色の波動がギガンティック・ファイターに当たり、ギガンティック・ファイターを粉々に破壊した。

「そして、この効果で破壊されたモンスターの攻撃力分、相手プレイヤーにダメージを与える！」

「ぐうぉおおおお！！！！」

グループのリーダー　ＬＰ１６００→０

朧瑩が、絆や友情、シンクロや融合を毛嫌いする理由、

それは彼の環境からなるものなのか、

彼は幼い頃から周りより飛び抜けていた。

そんな彼が周りがともに行動しているのを見ている時、

朧瑩は［群れてる奴らは弱い故に群れて強く見せようとしている

弱い者の足掻き］としか見えなかった。

それが、彼が絆と言った言葉を嫌う由縁である。

煢がグループ全員を拘束し終わり、依頼人に連絡を取っていた。

「……場所は伝えた。依頼料をちゃんと持って来い。じゃあな。」

煢はそう言い残し携帯を切る。

「……暇だから攫われていた奴らの枷でも外してやるか…。」

煢はさらに奥の部屋に進む。

その後も煢は捕えられていた者達を開放していった。

その中の最後の一人、

煢は何か違和感を感じた。

（こいつ、他の奴と何かが違う……）

その少女の髪は綺麗な青で、なぜか目を布で覆い隠していた。

その少女は突然口を開く。

「えっと、とりあえず、ありがとうと言っておきます。」

「お前、一体何者だ？」

煢は少女を問いただす。

「あの、私の眼のこと…分かるんですか？」

「眼？」

「……まあ、それは置いといて、私の妹を探すのを手伝ってくれませんか？」

夢の中の帝王

……これはきっと夢だろう。

漫画やアニメとかである英国の屋敷の窓から月明かりが差し込む。

その光で影を作っている者が1人、こちらに背を向けている。

体は自由に動く。恐らく明晰夢と言うモノだ。

そんな事を考えてたら、背を向けていた男がこちらを向く。

『珍しい、この様な場所に客人とは。しかも人間か。』

その男の姿は影でよく認識することができない。

『どうやら貴様の夢と俺が存在する空間が繋がったようだ。』

「知らん。さっさと起こせ。」

『ハッハッハッ、なかなか威勢のいい奴ではあるな。では、貴様に頼みたいことがある。』

その男は煢の態度を気に入り、何かを頼もうとする。だが、

「依頼をするなら金払え。」

という感じに、煢は一蹴した。

『生憎、持ち合わせがないのでな、済まぬが頼まれてはくれぬか？』

「金が無いなら用は無い。じゃあな。」

煢はその場を立ち去ろうとする。

『貴様なら容易なはずだ。シンプルな内容だからな。』

「シンプルな内容だと？」

煢はその言葉で立ち止まった。

『やはり喰いついたか。ああそうだ。本当にシンプルな内容だ。』

「……どういった内容だ。」

その内容に興味を示す煢。

「何、簡単なことだ。今貴様と一緒にいる女の両目を抉り取り俺に渡せ。』

「あいつか……。」

『簡単であろう？俺と同じく、他人の力を必要とせん貴様には、他者がどうなろうが知ったことではあるまい？』

「……ハァ。」

その言葉に、煢はため息をついた。

「…やっぱり、お前の依頼は受け入れられない。金が足りないのは勿論の事だが、他の奴らが形成している社会が崩れると、こっちにも響くんだよ。」

『……。』

「お前とは意見が合わない。じゃあな。」

『……やはり貴様は面白い。気に入った。』

瑩の言葉に対して、男は笑ったように思えた。

『先程のは冗談だ、だが、あの女の周辺には気を付けておけ。』

「……お前は何が言いたい？」

『それは今知ることではない。』

「お前は一体誰だ？」

『俺か？俺の名は――――――――――――――――』

夢はそこで醒めてしまった。

「……あ、やっと起きましたか？」

瞼を開くと、人攫いグループの所にいた少女の顔がそこにはあった。

「……一体何時まで居座るつもりだ？」

「私の妹探しを手伝うって言ってくれるまでです。」

「だから金を払え。」

「だからこうしてお手伝いとして働いてるんじゃないですか！！」

「雇った覚えはない。」

「うぅ〜〜〜！！」

……そう、こいつはあの依頼の後からずっと付きまとってきている。

依頼料を受け取った後、事務所に帰った後、事務所の前で何回もドアを叩いてきた。

まるで悪徳業者の訪問勧誘だ。

流石にそれが1週間も続くと、当然鬱陶しくなりめんどくさくなったから事務所に入れた。

そしたら今度は妹探しを手伝って欲しいだの何か食べたいだの我儘言い放題。

更にこいつ、持ち合わせの金がない。今までどういう風に生きてきたのか、少しは気になる。

こいつのことで分かっていることはもう一つ、こいつは自分の名前を捨てたとか言っている。

理由は依頼を受けたら教えるとかほざいている。

全く、はた迷惑な奴だ。

「居座らせてもらっている間は、お世話はちゃんとさせてもらいますよ？」

「お前はどっかの母親か。」

「いつかはなってみたいですね。素敵な人と子供に恵まれる家庭、私の夢です。」

少女は顔をあげて、幸せそうな表情を浮かべていた。

「話ずれてないか？」

「あっ、すみません……。」

煢が少女のことで気になっていることは、もう一つある。

それは少女が目を隠している理由だ。

今朝の夢も、何か関係があるのではと、疑問に思っていた。

「……おい。」

「はい？」

「その目を覆ってる布、外せ。」

「ええっ！？」

少女は驚いた。

「えっと……お、お断りします！！」

「そうか…、なら依頼は受けん。」

「えっ……？」

「素性も知らん人物に手は貸せん。とっとと帰れ。」
瑩はもう一度、眠りに就こうとした。
すると少女は、
「……外せばいいんですか？」
少女がそう言った時、瑩は少女の方を振り向いた。
「外したら、妹を探すのを手伝ってくれますか？」
「……ああ、手伝ってやる。」
「なら、外します。」
少女は自分の両目を覆っている布を取り外した。
少女の眼には、何か模様の様な物が写っていた。
「……それは？」
「残念ですが、これ以上は言いたくありません。」
そう言って少女は再び布を取り付けた。
「では、妹探しの方をお願いします。」
「…言った事は仕方ない。受けてやる。」

依頼内容（前書き）

久々の更新です。

更新スピードを上げたいです……。

依頼内容

「改めて依頼内容を確認する。依頼はお前の妹の捜索。それで間違いないな？」

煢は少女に依頼内容を確認する。

「はい、それで合ってます。」

「それじゃあ、お前の妹の特徴を聞かせてもらう。」

「可愛い所？」

少女は両手で頬を抑える。

「答えになってない。妹の名前は？」

「ないです。」

少女はきっぱり答える。

「……お前、ふざけてるのか？」

煢は軽くキレかけた。

「ふざけてません、妹は名前を付けられる前に捨てられました。ですので妹の名前はありません。」

「……お前の親は一体何を考えてそんな事をしたんだ？」

「私達の親だけじゃなくて、出身の村自体が1つの宗教を崇めていて、生まれたばかりの妹は容姿が普通じゃないからという理由で、異端者として村から追放されました。」

「宗教か……、下らねえ……。」

煢は少しため息をついた後、話を元に戻す。

「……で、その普通じゃないって容姿は、一体どういう感じだ？」

「はい、髪の頭頂部が赤で後頭部が青、前髪が白で右目がオレンジ、左目が緑です。」

「……結構カラフルな容姿だな…。ていうか、その妹が捨てられたのって赤ん坊の頃だろ？なら死んでるんじゃないか？」

「それはないと思います。」

少女は煢の言葉を否定する。

「なんでだ？」

「私のいた村の宗教はファルサって言って、異端者は1度村から追放して、数年後に宗派の祭壇で進行している神への生贄にするので、死なれたら困るからです。死体だと生贄とは言えませんからね。」

「何時の時代だよ……。」

煢は既に呆れ半分で聞いていた。

「私も昔はその宗教を崇拝してましたけど、妹の事があったから『もうここを信用することができない』って思いましてね、村を飛び出して妹探しを続けてるんですよ。」

「それでこの前まであの人攫いグループに捕まってたってわけか。」

「あのグループ、何回もアジトを変えてるので、そうやって転々と色んな所旅すればいつか妹が見つかるんじゃないかなって思ってました。」

「アジトに閉じ込められてるんだから分からねえだろ。」

「はっ！！」

少女は今頃になって気付く。

「馬鹿だ……。」

瑩は少女の間抜けさに溜息をつく。

「まあ経緯はどうでもいいとして、昔生まれた村から追放されて、カラフルな容姿をしていて、名前のない奴を探すってことだな？」

「はい。」

「それじゃとりあえず依頼を受けるにあたって、お前の名前を聞いておく。」

「名前は捨てました。」

「それは通らないって言ってるだろ。」

「ん〜〜〜〜……」

少女は呻き声を上げる。

「さっさと言え。呼び名でもいい。」

「……なら、シアでお願いします。」

少女はシアと名乗ることにした。

「これで依頼は受諾する。出る準備をしとけ。」

「えっ？」

「『えっ？』じゃない。暫くこの事務所を空けるから、出る準備をしとけと言っている。」

「その間私はどうすればいいんですか！？」

「お前、通信機器とか持ってないだろ。」

「はい。」

「探すのがめんどくさいから付いてこい。」

「私もですか！？」

「他に誰がいる？」

煢は金庫から金を取り出し、出かける準備を始めた。

「ね、寝る時はどうするんですかあ！？」

シアは顔を赤くしながら煢に聞いた。

「個室を取ってやるから安心しろ。さて、問題は探し方だな。どうやって探すか。」

「お困りのようですね？」

「……またお前か。」

事務所のドアから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「君達が探してる人物は、大体2年後にネオ童美野シティに来ますよ。」

「……お前の依頼と同じ時期か？」

「そ～だよ？」

「そこに2年後、妹は現れるんですか？」

シアはサロッゴに確認する。

「そ～だよ？」

「その喋り方はむかつくからやめろ。」
煢はサロッゴを睨みつけた。
「すみませんでした……。」
「ていうかなんでそんなこと知ってるんだ？」
「一応神様なので！」
「「……」」
「……あれ？」
一瞬、場の空気がしらけた……。
「……情報の件は感謝する。だが……」
「だが？」
「お前の依頼は引き受けない。」
「ええええええええ！！！？」
その時、サロッゴの悲痛な叫びが、辺り一面に響いたという……。

主人公設定（前書き）

こっちの方もいい加減主人公の紹介をしなくては……。

主人公設定

名前　朧　煢

年齢　１３歳

身長　１４９ｃｍ

容姿　赤髪で整った顔立ち

性格　クール・律義

本作の主人公。幼少期から周りより優れており、周りの人間がまとめてかかってきても勝てないほどの強さを持つ。この事があってから彼は『群れる奴は弱い』という独特の考えを持ち、複数のモンスターを必要とする融合モンスターやシンクロモンスターを『弱さの象徴』として認識している。１０歳頃に実家を飛び出し、現在のように生活している。好きな言葉は『孤立無縁』。趣味は仕事。

使用デッキ　孤高デッキ（1体の時に効果を発揮するモンスターのデッキ）

Ｄホイール　ソリチュード　真っ黒なＤホイール（後部に荷物置きがあり、やろうと思えば二人乗りができる。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7172y/

遊戯王　ソリスト

2012年1月6日20時48分発行